<table>
<thead>
<tr>
<th>著者</th>
<th>平川 祐弘</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>大手前大学人文科学部論集</td>
</tr>
<tr>
<td>巻</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>ページ</td>
<td>107-126</td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>2004</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://id.nii.ac.jp/1160/00000576/">http://id.nii.ac.jp/1160/00000576/</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
平川祐弘

要旨
平川はかねて『盆踊りの系譜—ロティ・ハーン・柳田国男』と題して文学的な連結を巡っての盆踊りの記述をたどった平川『オリエンタルな夢』の収録、ロティのバブル族の舞踊記述に感心していたハーンは、それを英訳し、さらにはロティのように日付で山陰の盆踊りを見て記録したモラエスの『徳島の盆踊り』の解釈に、川田順造の調査に客観的な観念的な主張が混じっているのではなかろうか。またハーンの盆踊り記述を読み、自分も盆踊りを見て書いたモラエスは信ずした。ハーンもモラエスも盆踊りをTaipei, Pekingとして見た。ところがロティやフランス人・キングがハーンの文章を学んだらしめているのは、そのようなハーンの自信と喜びの中にひそんでいるのではあるまいか。

キーワード：異国趣味、盆踊り、ハーン、モラエス、ロティ、フランス、キング、柳田国男

再考—ハーンからモラエスへ
ロティの実録には、「ロティ・ハーン」という名前が現れる。ハーンは、ロティと同様に、日本を舞台にした文学作品を多く生産した作家である。ハーンの作品は、日本の風景や文化を含め、ロティのものとは異なり、一般的に西欧風の描写が見られる。しかし、ハーンも同様に、文献の読み取りを通じて、これらの文化を理解し、その要素を作品に反映させる能力を有していた。
ところでお互い学問史的には十九世紀の後半におこった学問だが、ハーンは独学でいちはやくその参与観察などの方法を取し、それを見自分の作品に生かそうと念頭に置いた。ニュージーランドの手本にも、フランス領西インド諸島でも、どれの文章のローマ字書きにはOme oto otoなどの単純な印刷ミスと思われる箇所もあるので、それは訂正した。なお東京からハーンに同行した詰察の真鍋見は「上市」の漢字を誤ってKen fluteと伝えたが、正しくは「ウィオチ」と読む。さらに正確という点にこだわれ

おく

（109）
人文科学部論集
第5号

がそれである。良い言葉ではないだろうか。このような日本語の歌の文句が採用されておればこそ、ハーンの紀行文は先生をはらむのだ。

それから十数年後の今日、上市は中山町と名を改めたが、いまでも年配の人を中心にとする盆踊りにはその歌詞をまき散らしている。しかしこれは同じ歌詞だが土地の人の手で伝承されてきたというわけではない。盆踊りは、しょっちゅう歌われる理由だけに、月下に目を閉じて笑顔を見せていよう。今この歌詞が、ハーンを心に呟き、その地でハーンの旧生徒たちにかかって、自分の日本の故郷の盆踊りやその民俗の心を書き留めようとする人がわが国からも出て来た。それが日

ハーンは学生を帰じた後、ハーンが日本地方の盆踊りの模様を文筆

屋敷にかってハーンを治めた根岸家の当主とは同級生であった。柳田はハーンが本郷で教えていた頃、同じ東京の菲科で学生だったから、ハーンが大正四年

には松江にまで赴き、その地でハーンの教えを教えてくれなかった。以前は、あの歌は何というのだろう。何故聴いて居てもどうしても分らなかった。それをある方から授けて、その言葉をいま、いったんは松江の北塚の武家の

衰歴になる一文を六年後に補って。前回、あの歌をする方、その歌の文句を書き足して解説を加えた。前回は聞いているのが、当時柳田は大学四年

にあたる。それは同じ東京の菲科で学生だったから、ハーンの教えを教えてくれなかった。といえども、自分自身の言葉を置くにあたって、はなにが

海の方を向いていたら、年がさの女が鼻歌のようにして「なにかとやれ

なにかとせれのう」と歌ってくるから。やはり柳田の想像に

(110)
昨日のことだった。何気ないともせよ、どうなりとなさるがよい。女が男に向って呼びかけた恋の歌と柳田は理解した。しかしこの盆踊りの歌で誰もが耳にすることをこの世に存在する。だからあの清光の下のような音符も、色々として我々が見ぬて見えたと、黙って笑ふばかりでどうして此歌を教へてはくれなかった。通りすがりの一夜の旅の者には、仮令にして聴かせても某心持は解らぬと曰ふことは、知って居たのであらざるやと感じて居たのである。

私はこの柳田国男の文章を読んで、とある解釈だろうと思うともに、この人は土地の人をよくつかんで居るようであるならば、それゆえに言葉はからしに聞えず、わかるのは「ガソリン」とか「トマト」といった外来語だけで、子供心に非常なるpaysageを思わず庭の芝生や家の前の桜の下でじっとしている。昭和二十年前の目の前にある町の灯火の光を眺めている。私は何気なく、何気なく居て心はばかりいう目で、心を掏さぬか。
川田順造さんが話したことだが、抒情詩人柳田には主観的な思い入れはやはりどこか強さで、柳田の感性を対象におきつけてし

学生時代の川田順造は最晩年の柳田国男のお宅にうかがって対面し何度か話を聞いたことがある話である。六十歳の彼の死を

記したのは、九十四歳の柳田国男の家に住みついたとき、川田は「陸中、浜の月夜」という一文を送っていた。南無とやら、南無とら

の変形ではいかない。と中村さんは考える。その柳田の解釈が正しいかどうか、それも実はわからない。そもそも土地の人は川田氏の間に答えなかったんだ。と小児内の人は川田氏の問い合わせに答えなかったのだ。

文学的見込みは彼を導き出す。清光館鉄の調査体験を重ねた川田氏は七十七歳に近い

信伝のプロフェッショナル・ボンネット・ファントジーに感わされたのだった。サモアの男女の性行動についてマーガレット・ミ

リードの解釈などが一時期もてはやされたのも、大局的に見れば同じ読者心理に乗じたからだろう。
モラエスが日本を見る眼は徹底してハーン風である。このボルトガルの海軍将校はフランスの海軍将校であったロティも同じ。実際には、モラエスの言語を一度は見たというが、モラエスが共感し感化されたのは、なんといってもハーンの日本である。

モラエスが「徳島の盆踊り」などでとりあげる主題は、日本庭（55）、巫女（21）、野鳥（34）、海岸（35）、都将（34）、地蔵尊（30）、平安（42）、家庭の祭壇（50）、墓場（45）、墓石の紋や記さ

それらは印象記を書く次元のハーンに追従したが、モラエスは生きる次元できわまったから、モラエスの随筆を通しての出来事を見ることがあり、ハーンが書いたという趣がある。ハーンの文

章を実際に読むことができる。モラエスは、モラエスの随筆を通しての出来事を見ることがあり、ハーンが書いたという趣がある。ハーンの文

章を実際に読むことができる。モラエスは、モラエスの随筆を通しての出来事を見ることがあり、ハーンが書いたという趣がある。ハーンの文

章を実際に読むことができる。モラエスは、モラエスの随筆を通しての出来事を見ることがあり、ハーンが書いたという趣がある。ハーンの文

章を実際に読むことができる。モラエスは、モラエスの随筆を通しての出来事を見ることがあり、ハーンが書いたという趣がある。ハーンの文
三十五歳の時にマカオから初めて日本を訪れる。九三年からは毎年のように帰来するが、雇用の記念日には毎年出ているのが、馬車の旅を日本を訪れてその魅力にとらわれるようになった。マカオは「シナ」に長年住み、単調な生活、不毛の海岸、不潔な村を見慣れた者のにとっては、対照はあらためて印象を与えたのであろう。マカオは一度も故国へ帰らなかった。九三年八月二十三日、神戸市海岸にデッカーがボルトガルの関心を呼んだからである。しかし後半に次ぐ高位の人物であった。もっとも在日ポルトガル人の数などたかが知れた時代である。身辺の世話はユキの家である、徳島を家にとめた神戸領事の所を訪れる。在日ポルトガル人は大阪市に住んでいる人が多い。これという定説はない。\venda minuete「マカオは士人になった」といったことであろう。\n
事故の場合は、マカオが水の流れと日本を縫い合わせて、自分の心中を伝えていている。\n
徳島落ちにいてはほ

（115）
人文科学部論集
第5号

ベグサと盆を説明すると、「盆」は「死者の祭り」という意味の仏教用語である。お盆は陰暦の七月十三日から十五日にかけて、この

日本の記念祭とクリスチャンの記念祭の在り方と観点の間にははっきりした違いがある。盆踊りとは「死者の祭りの踊り」ということで、日本

では家族の誰もが自分たちの死者を崇めている。夏の時季が近づくと盆踊りが盛んであるが、家族の誰もが自分たちの死者を

崇めている、今の場所によっては崇めている。徳島の人たちは、自分たちの風習に関してひそかに

ここで私が説明を補うと、お盆は正しくは盂蘭盆会という。なるほど仏教用語であるには相違ないが、もともとは仏教の行事ではない。

ちなみに盂蘭盆会の典拠となっている盂蘭盆経は目蓮が餓鬼となっ

た亡母を救う物語を詠まれているのに、中国で作られた仏経である。

教理は以前から伝わっていた。アイルランドの万霊節と密接な関係が

あるべきである。しかし、万霊節の夜やクリスチャンの国では踊りはしない。

それらははっきりした違いながら、自分たちの風習に関してひそかに

的先で、自分にもかかってこそ、こう書いている。

六月卒を迎えたモラエスにとっていま何が大切なのか。自分はあとの一年、二年、三年、何年だからなが、自分たちは死者を

報ずる行いを、町並みを活気づける年が来るだろう。その時、

何もわからないあわわれなる闇入者である私信者の群にまじって、

周囲の密接な関係を説かれている限りが亡くなった知人たちを思い出す。

(116)
現世の肉体の棲家であったあわれな亡霊をこの地に捨てて来た異国の魂も、この篤信者の祭りの一部にあずかって欲しい。とモラエスはいう。モラエスの見ること、日本では死によって、家族の成員の絶対的除去という事は起こらない。日本では死者は生き続ける。徳島では人は一度自分たちを訪ねに来る死者のために踊る。それが盆踊りなのだ。とモラエスは考えられる。そのような形で示される生者と死者との特別な友愛がいまや人生の最晩年において望むことは西洋人の知人たちが当初考えたばかげたものではないとも思

(117)
人文科学部論集
第5号

わめが多々集められた。しかし年末のモラレスが間に入り、寄せたのはうつようちんな西洋を素せた日本ではなかったらしい。もっともモラレスは

凡軸面を楽しむ。それだからこそ、祖国を縁切りしたようである。ボルタールに誤ったものである。ボルタールはモラレスを記録されている。具体的な細部の観察は博物学者のように正確で、感傷主義によって筆を変えて書くようなことはし

してない。モラレスは公私とも隠れていた。その如き筆で、遠慮的に生きている。しかし親しい敌人とのように、小唄を歌い続けられるだろう。専門の講義、特別の友愛とのコミュニオンが逆にひととお強く感じられた。それだけに、 ~= ~の活動は、小唄を呼ばず、海老のように曲った体で踊り続ける十七過ぎの老嫗にいたるまで、踊り興している。来年は何か、この世の人ではないのかかもしれない。だがその際に、姫が訪れ、故の人々の間で生者と死者

の境の踊りが、赤を物語る勇猛なお湖をくれるだろう。専門の講義、特別の友愛とのコミュニオンが逆にひととお強く感じられた。その如き筆で、遠慮的に生きている。しかし親しい敵

人立たれたままである。その如き筆で、遠慮的に生きている。しかし親しい敌人とのように、小唄を呼ばず、海老のように曲った体で踊り続ける十七過ぎの老嫗にいたるまで、踊り興している。来年は何か、この世の人ではないのかかもしれない。だがその際に、姫が訪れ、故の人々の間で生者と死者

の境の踊りが、赤を物語る勇猛なお湖をくれるだろう。専門の講義、特別の友愛とのコミュニオンが逆にひととお強く感じられた。その如き筆で、遠慮的に生きている。しかし親しい敌人とのように、小唄を呼ばず、海老のように曲った体で踊り続ける十七過ぎの老嫗にいたるまで、踊り興している。来年は何か、この世の人ではないのかかもしれない。だがその際に、姫が訪れ、故の人々の間で生者と死者

の境の踊りが、赤を物語る勇猛なお湖をくれるだろう。専門の講義、特別の友愛とのコミュニオンが逆にひととお強く感じられた。その如き筆で、遠慮的に生きている。しかし親しい敌人とのように、小唄を呼ばず、海老のように曲った体で踊り続ける十七過ぎの老嫗にいたるまで、踊り興している。来年は何か、この世の人ではないのかかもしれない。だがその際に、姫が訪


キングは作品で日本人に対して時々詭譎な皮肉や物語をいう。こんなこともあった。
一九九〇年、ハーン来日百年記念松江会議の際も、作家のハーンは、「日本ではハーンでも大作家だ」と言ってのけた。日本を旅行しているだけなので、作家を称える必要はない。

キングは作品で日本人に対して時々詭譎な皮肉や物語をいう。こんなこともあった。
一九九〇年、ハーン来日百年記念松江会議の際も、作家のハーンは、「日本ではハーンでも大作家だ」と言ってのけた。日本を旅行しているだけなので、作家を称える必要はない。

差別は困難によるものだが、『ラックオブディスクリューション』はもっと困難である。なぜなら、ハーンの旧居に隣接して小泉八雲記念館が建っているからだ。ハーンはこの作家を称える必要はない。日本はハーンでも大作家だという。
森教授はもう見破ってくくっと笑った。森教授も土地の八雲鏡仰家の人々への態度が無分別なうえ方に辟易していたのである。そんな会話を終えても、日

観客が損なわされて困る由だが、それは日本各地で見られる通弊のようである。

ではその悪態をつくペンギンはハーンを評価しないのかというと全く逆である。ペンギンは、「アンソロジー」としての選択も悪くない。イベントで「アソビション」も興味深い。そこにはハーンが、ハーンの風格に揺れると考えていた作家はいない。

千九六十年代の初め、筆者にあたる日本に関する多くの書物を読んでも心構えをした。ほとんどどの書物はハーンよりも手になるものだった。しかし筆者がしてきたこととは、手箱や細部は別として、私が日本について見るべきもの。最初の動いカ

著者はやはりハーンの人がたった。
「日本の雨傘」という浮世絵風のタイトルのもとで集成された八つの短編は、キングの日本時代の作品の誘をまとめたものである。一九九四

年にロンドン出版から出た。その短編の一つは「燈籠流し」という題になっているが、原題は「The General of Dead」という。すでに一九六

年の書物の中で深く印象を受けて「燈籠流し」を利用したのは「知られぬ日本の面影」の中の「盆市」、日本海の浜辺での「加賀の漁戸」など

あいの微妙な心理が、キングの自意識過剰な筆致で描かれている。研修が終わった翌日、下心があつてしまった在日を一日のばした英国人女性教師ハ

リエットと日本教授牧野とのつきあいが、盆市での再会を背景に描かれている。動揺と体ごと跳ねて向うを向いてしまった。ここでは日本の男性、日本

の男性と観光客、その悩みに変わる実感が描かれている。「燈籠流し」の作中の英国人女性を中心に、ハーゲンがチェンバレンにあたった紙で描いたた

番観光をのぞすの友人を心の奥まではいきはらき出し、突然不可解な雰囲気へ向かってしまう。ここでは日本の男性、日本を死者と生者とは結ばれる、

外人の等はその被の外に取り残されるという観念が、英国人女性と日本人男性を分けた道具立てとして用いられている。
おいても、ハーンのその特色は際立っているのである。

ここをその特色なるものを、来日第一作『知らぬ日本』の面影、二八四年の中で、ハーンの後の怪談、二九〇四年を予兆する一

篇日本海の浜辺で、即して、呑吹き呑呑を聞き呑呑て呑呑。この一編は死者にまつわる習俗を挙げ、霊的なものといおうべきもののが金篇に
満ちている。旅の物語はとより海岸の風景に始まる。月の十六日月の海が『仏海』と呼ばれ、海難にまつわる俗信が語られる。その夜、帰り遅
れた船の周りには死者が『捥桶おくれ』と群がるのだという。そして海岸の墓地、赤崎町花見湯の描画が引き続き、人力車が着いた浜村の
宿では、彼が波に沈む一部始終を見たという信の女の上の言葉があらわれる。こうして死者と生者の交渉が、自然描写、民俗誌、体験談、怪談などの
の布団の話、などの民話を見た時、「あたは私のはてだ」という喜びでもあった。「知らぬ日本」について書き換えるほどになった。ハーンは松江で日本
の人が物に対してつたわる才覚があった。そんなハーンは松江で日本人の霊の世界を探る上で、手ごたえがあった。自分はこの協力者を得て、
これを持っているのではあるまいか。日本人読者もあるべき本能を持っている、と見做されてきたのだろうと思う。

JAPAN INTERPRETERに限らず、外国研究者の評価は、必ずしも研究家の母国の学界が決めるものではないのでないか。手掛けて

の評価も米英の学界だけで決まるものではない。長い目で見れば、研究された当該国の人の意見が意外に公平な判断を下しているのではあ

(124)
文章的内容无法自然地阅读，因为图像中的文本是日文，而且文本内容无法准确地被识别。